The Entomological Society of Japan

甲蟲學者ルイス氏を偲びて

理學士 岩川友太郎

私がルイス氏に初めて面會したのは今から四十八年前の昔の事ゆへ月日の如きも判然せず、且つ同氏より貰ひ受けた日本產甲蟲目錄を始めとして、二三の論文別刷等は彼の大震火災の際一切烏有に歸した爲に據るべきものもなく、單に記憶を辿る外なきも、初對面が明治十三年であつた事丈は、吾人が故ウヰトマン先生に就き勉强して居つた時なのでよく記憶して居る。吾人が故モールス先生より動物學を習い始めて以來、何となく甲蟲類に興味を覺え、從て日曜其の他祭日等暇さへあれば郊外に出でて甲蟲を採集したものであつたが、モールス先生は寧ろこれを奬勵する方であつたが、ウヰトマン先生は動物發生學以外に研究心を向くることを忌み、過々日曜に集めた甲蟲を翌朝實驗室內にて整理して居るのを見らるると What is the use of collecting insects? と小言を頂戴するのが例であつた爲めに、ルイス氏を訪問するのを先生に對して幾らか遠慮した位であつたので、旁々同氏に面會した年丈は一層其の記憶を强めた譯である。

私は當時三百種許の甲蟲を所有し、教育博物館の故波江元吉氏は二百種近く、又石川博士も幾分か所持して居られ、兎も角五百種內外の甲蟲は蒐められてあつたが、學名が一つも分からんので皆失望して居つた。甲蟲に關する書籍にして當時教室にあつたものは、PACKARD の Text Book of Entomology と FIGUER の Insects World 位に止まりしゆへ、昆蟲に關する吾人の智識は極めて幼稚であつた、其處へ甲蟲の專問家ルイス氏が英國博物館から出張して横濱に滯在し居ると聞いた時は、實に救世師にでも遇つたかの如く嬉しかつた。助手種田織三君の斡旋に依り、ウヰトマン先生の許可をも受け、大學より横濱へ出張を命ぜられ石川博士と同行したやうに覺えて居る。石川君は當時豫備門の教師であつたフェントン氏と伴れ立ちて頻に蝶々を採集し、昆蟲に就ては深き興味を持たれて居つた。

NII-Electronic Library Service

The Entomological Society of Japan

横濱のグランドホテルへ突然と氏を訪ひ、刺を通ずると快く會つて呉れた。其の後同氏が大學を訪問せし時と、同氏に會つたのは前後二回のみであつた故、容貌風采の如きも詳しく記憶せず、唯體格の割合に矮小にして瘠ぎすな人であつた位を記憶するに止まる。案内に伴れて室へ通ると、室内は標本函にて狼籍を極め、其の中にルイス氏は妻君と共に標本を裝置して居られた。來意を告ぐると快諾せられ、直ちに吾人の持參せる標本を調べて種屬を類別し、是より幾番幾番と番號を誦んで吾人に筆記せしめたが、私は最初其の意を解し得なかつた。然るに全部の標本に番號札を附し了はつた後、吾人に日本産甲蟲目錄一冊宛を惠與せられ、其の目錄の番號と各標本に附せる番號とを照らし合はして學名を知るべしと、是に於て其の意も自ら解され、且つ同氏の强記には驚かされた。其の目錄に擧げられたる本邦産の甲蟲は二千餘種もあつたと思ふが、吾人の持參せる五百種許の中にも、同氏が既に新種と認めたるもの若干あつた所より察すると、當時同氏の採集せる標本中には數多の新種を加へられたことと想像せられた。

其の時同氏が日本産甲蟲に就きて吾人に語れる談話中、記憶に遺れるもの一二を記さんに、同氏の本邦に渡來せるは明治九年來前後三回にして、各地に渉り採集せる甲蟲は數萬に達し、今日の如きも本國に送附せる標本は既に三萬點に達せりと。標本中マイマイカブリの一種にして北は北海道より、南は長崎に至る迄、廣く分布せるものを、順次地方別に並べたるものあり。是は其の色澤の風土に從つて相異なる狀を示さんが爲めなりとの言なりしが、北方の寒地より南方の暖地へ進むに從ひ、逐次色澤の鮮美を加ふる狀、歴然として興味深きを感じた。同氏は採集者數名を雇ひ、横濱郊外の地圖を按じて、これを諸方に派出せしめ、時々齎來する生蟲を一々點檢し、直ちに標本に裝置し居られしが、立派なる標本を作るには斯くするに限るといはれて居つた。

甲蟲の採集法に就て、吾人が同氏より敎はれるもの一二を摘記すれば、灌木の枝葉間に潛伏せる甲蟲を採集せんとする時には、其の下に蝙蝠傘を擴げ、上より枝葉を敲き、或はこれを振ひ搖かして、甲蟲を傘の中に墜落せしむべ

NII-Electronic Library Service

The Entomological Society of Japan

し、此の際甲蟲の拾集を便にする爲めには、小織骨間に布を張り詰めて間隙を塞ぐを良とす。喬木の上に棲息せるものを更に大仕掛にて採集せんとする時には、白金幅の大なる敷布を地上に擴げ、木に登りて枝を搖り動かし、墜落せしめてこれを採集するにあり。

吾人採集せる甲蟲を殺してこれを携帶し、或は貯藏せんとする時は、悉く酒精瓶に投入するを例とせしが、ルイス氏は大小の管瓶數多を携へ、蟲の大さに準じて各種別々に其の管に入れ、歸宅の後に沸湯にてこれを殺し、直ちに其の姿勢等を整ふ。若しこれを遠方に送附せんとするか、或は一時貯藏せんとする時には、鋸屑の中に容れ置くを良とす。斯く乾燥せるものを取り出して標本に製せんとする場合には、復び沸湯中に入れて關節を軟らげ、即ち戻して姿勢等を整ふ。以上は吾人が同氏より傳授せられたる當時の新智識なりしが、其の爲めに吾人の昆蟲採集熱は一時奬勵せられたものである。

因みに當時は東京に一軒の動物標本屋なく、又硝子製造業も微々として、今日の如く盛ならざりければ、採集用の管瓶も容易に手に入らず、蟲針の如き特に外國へ注文せざれば購入の途はなかつた。昆蟲函に必要なるコルクの如きも素より拂底であつた爲めに、或は黍稈を平たく削りて函底に貼り詰め、或は空德利のコルク栓を薄く切りてこれを貼り付くる等、窮策を巡らしたものである。明治十年前後より、普通教育が隆盛になるに伴れ、動物標本の必要に逼られし所から、文部省は教育博物館に標本を造らしめ、府縣の小學校に拂ひ下げて漸く急場を凌ぐといふような世態であつた。

ガロアムシ樹上に昇る習性あるか、

久内清孝君からの通知に依ると。「一九二五年六月二日平山君が小佛の下で採りしものの内、キングが記載した程度のガロアムシがあります。平山君は樹枝をタタキアミで打ち、之を得たる由。果して然らば樹に上る習性あること實正です。」小佛と云ふのは高尾の山續きの小佛峠の事で、平山君とは平山修次郎氏の事である。之を事實とすれば朽木や岩石の下のみが彼の棲家でないと見える。尙同科の一新種が長崎からシルベストリーに依つて記載せられた事を附記して置く。

（八月二十日、矢野宗幹）

NII-Electronic Library Service